

應答

〔徒然草上〕久しくへだりて逢たる人の、我方にありつる事、數々に残りなくかたりつゝくるこそあひなけれ、へだてなくなれぬる人も、程へて見るは、ばづかしからぬかは、つぎさまの人は、あからさまに立出ても、興有つる事とて、いきもつぎあへず、かたり興するぞかし、よき人の物語するは、人あまたあれど、ひとりにむきていふを、をのづから人もきくにこそあれ、よからぬ人は、誰ともなく、あまたの中にうち出て、見ることのやうにかたりなせば、みなおなじく笑ひのゝしる、いとらうがはし。

〔備前老人物語〕一ある功者の語りしは、物いふ時、一きりくにしづめ、靜に心をさだめたるがよき事也と。

〔藻鹽草十六〕言

さしいらへいらへ、こたへ なげのいらへいらいがしろの儀也。○中略

〔倭訓栞前編三〕いらへ 應答をいへり、よて眞名伊勢物語に報字を用ゐたり、徒然草にさしいらへとも見ゆ。

〔枕草子九〕きのふけふ物いみにて侍れど、雪のいたくふりて侍れば、おぼつかなさになどの給ふ。
○藤原 伊周 みちもなしと思ひけるにいかでかとぞ御。いらへ子、伊周妹定ある。

〔徒然草上〕何事も入た、ぬさましたるぞよき。○中略 かた田舎よりさし出たる人こそ、よろづの道に心得たるよしのさしいらへはすれ。

〔倭訓栞前編三〕いい。 唯字をよむも音の響きにはあらず、倭語の答辭なるべし、曲禮に先生、召无諾唯而起とも見え、文選注に、唯々謙應也といへり。

〔禁秘御抄上〕一 恒例毎日次第

抑御手水は近代内侍内々供之。○中略 女官申御手水まいらせ候はん、女房あといふ、女官御楊枝ニ